

文化運動としてのハーレム・ライターズ・クルー

——人類学とアートの結節点の探求のために

中村 寛

The Harlem Writers Crew as a Cultural Movement: An Exploration into a Shared Realm between Anthropology and Art

Yutaka Nakamura

This article examines some aspects of the Harlem Writers Crew, a social and cultural movement that began in the late 1980s and continued throughout the 1990s in Harlem, New York. It was organized by two sociologists and ethnographers, Terry Williams and William Kornblum, to establish a place where youths from the public housing projects in Harlem could write and read their journals, discuss their daily experiences, and share their thoughts and concerns. It was also a project where the sociologists could learn from dialogue with the youths, and much of what they learned during the first four years of their project was recorded in their ethnographic work *The Uptown Kids: Struggle and Hope in the Projects*, which I translated into Japanese and published in 2010. Using this book, as well as my dialogue and interviews with Williams and Kornblum, as an ethnographic document, this article seeks to clarify the specificity of the Harlem Writers Crew. It perceives the project as a cultural movement, a collective action which bespeaks the production of meaning and value. It argues that the Writers Crew was not only a place for discussion but also a place where the two sociologists committed themselves to the youths and “intervened” in their lives. It further argues that such “intervention” was not one-way. The sociologists’ lives were also “intervened in” by the youths and by the social problems they had to face in their daily lives. Behind this article also lies my larger research project, which attempts to examine the epistemology of various cultural movements and (re)-explore, or rather (re)-establish, a shared realm and viable collaboration between anthropology and art.

1. 問題の所在

本論の目的は、1980年代後半から90年代にかけてニューヨーク市ハーレムで行なわれた社会・文化運動の試みであるハーレム・ライターズ・クルーを、同時代の歴史・社会的コンテクストのなかで記述・解釈し、その現代的意義を明らかにすることにある。この運動は、ハーレムの公営団地に暮らす若者たちが日誌を書き、それを持ち寄り、議論を交わすことで展開していった。その最初の4年間の記録は、拙訳『アップタウン・キッズ——ニューヨーク・ハーレムの公営団地とストリート文化』（大月書店、2010年。原著は1994年。）として公刊されている。⁽¹⁾ 運動の時代背景や意義についても、巻末に収められた私自身の解説のなかで、すでに簡単にではあるが触れている。そこで本論では、このエスノグラフィをひとつの記録資料として用い、運動の特徴をさらに深く詳細に描写・分析したい。そのような作業を通じて初めて、その他の社会・文化運動との比較が可能になるだろう。

本論の背景には、人類学とアートとの結節点を今一度探り直し、「表現」にかかわる諸運動のエピステモロジーを明らかにしたいという筆者のより大きな研究構想が存在する。人類学および社会学のトレーニングを受けてきた筆者が、多摩美術大学において「文化人類学」などの数々の講義を行ないながら念頭に置いてきたいいくつかのことを開示するとともに、2010年12月に多摩美術大学の学生たちの呼びかけに応じるかたちで立ち上げられ、その後中央大学、明治学院大学、一橋大学、武蔵野美術大学などの在校生や卒業生たちとともに継続している自主ゼミナール「人間学工房」の試みを方向づける際の参照軸としての、

分野としての人類学とアートは、互いに重なり合う領域で仕事を展開し、刺激を与え合ってきた。たとえば、人種差別の色濃く残る20世紀初頭のアメリカ合衆国で人類学を確立したフランツ・ボアズが、文化相対主義を強く打ち出しながら先住民アートに強い関心を向けたことは有名だし、ボアズのもとでトレーニングを受けたゾラ・ニール・ハーストンが、ハーレムを代表する黒人女性作家として、数々の名作を生んだこともよく知られている。⁽²⁾ また、西洋近代の価値を問い直す作業とともに民族学を展開したマルセル・モースに、岡本太郎が師事し、深い影響関係を保持したこと、クロード・レヴィ＝ストロースのもとで学んだピエール・クラストルがグアヤキ族のもとでの長期のフィールドワークを経て書いた『グアヤキ年代記』に、若き日の作家ポール・オースターが感銘を受けて翻訳し、序文とともに英語版を出版していること。⁽³⁾ これらはすべて、人類学とアートとの相互の影響関係を示す例だと言える。

だがこうした明示的な影響関係に加えて、人類学とアートは両者とも、異なる表現形態やメディアを通じてではあるが、人間の諸活動のなかでとりわけ意味の産出や、価値の生成、認識

および感性の変更に深くかかわるという共通性を持っていると言える。人類学者や社会学者の描くエスノグラフィは、「自分」とは「異なる」ように思えた「他者」への「驚き」から出発し、「異なる」ように見え、時に「不合理」にさえ映る現象の（「自分」との）共通性や普遍性に目を向け、その探求の過程で自らの思考の認識論的前提に変更を迫る。西洋近代の学問として出発した人類学は、それゆえに、普遍的に見えた西洋近代の認識をいち早く特殊性のもとで理解し、その限界を乗り越えようとした。他方でアートは、中沢新一も指摘するように、象徴や比喩を媒介として、社会や共同体の原理とは異なる論理を探求し、描き出し、指し示してきた。⁽⁴⁾ 同時代のなかで公には語られないことがら、時として軽視され、見過ごされてきた事象、「狂気」や「呪われた部分」に目を向け、表現してきた。

もちろん人類学やアートだけでなく、技術の革新や科学の発達もまた、人間の認識に囚らずも深く鋭く変更を加えることは、これまでも指摘されてきた。文字の発明・発達は記憶のあり方を中心とした人間の認識に大きな変化をもたらしたし、印刷技術や小説技法の発達もまた人間の共同体意識に大きな革命をもたらした。⁽⁵⁾ 遺伝子操作の技術が、その技術が実際に可能にする範囲を超えて、「自然」と「人間」に関する人びとの認識と想像力と現実の行動に、根本的な（もしかすると致命的な）変化をもたらしたことは、科学史家の指摘を待つまでもなく想像に難くない。また、メディア技術自体の物質性とそれに備った特性が、つねにすでに独自の論理で人間の認識を規定するとしたフリードリッヒ・キットラーの指摘から考えれば、インターネット技術が人間の統制する道具ではなく、技術が先行するかたちで人間がその道具となっていくプロセスを具体的かつ詳細に見ることができる。⁽⁶⁾ しかし、人類学やアートによる、作品を通じた価値や認識へのかかわりは、こうした技術や科学のそれとは別次元のものである。それは生み出した作品を、時代状況のなかで振り返り、想像力の限界を前提としながら、時として自らの作品の前提そのものをつくりかえていく余地を、その領域のなかにもぐりこませている。

それゆえに、さまざまな思考実験や表現上の工夫が生まれる。エスノグラフィにおいては、研究と叙述の条件に応じて諸々の工夫がなされてきたし、認識や表現における実験が行なわれてきた。たとえば、メキシコ南部のインディオ村落を中心としてラテンアメリカ社会を長年調査してきた文化人類学者の落合一泰は、フィールドワークを通じて出会った人々の生活の息遣いや文化のダイナミズムをよりよく捉え、臨場感をもって表現するために「エスノグラフィティ」（強調は引用者による）という概念を提唱する。⁽⁷⁾ 1970年代頃から台頭する一連のポストコロニアル批評の流れのなかで、歴史的に非ヨーロッパ社会を対象としてきた人類学が批判（あるいは非難）の対象となり、エスノグラフィの認識論的前提の問い直しが行なわれ、「表象の

危機」が叫ばれていたときになされた落合のこの提案は傾聴に値する。そして落合が、「エスノグラフィティ」を書く（描く）という実験において、シュールレアリストたちによるコラージュと相関関係にあるモンタージュ技法をひとつの参照軸としていることは、少なくとも以下の二点において示唆に富んでいる。

第一に落合のこの提案は、人類学がアートを分析や批評の対象とするだけでなく、アート界の表現形式におけるさまざまな実験からより積極的に学び、そのあり方を学問のあり方に反映させていく道筋を切りひらいている。第二にそれは、人類学者の書くエスノグラフィを、一定の書き方のルールに則した「科学的研究の成果物」であることから解放し、広義のアート作品として捉える道筋を示している。⁽⁸⁾

本論では落合にならって、人類学をひとつのアートとして捉え、またそれと合わせて、アートをひとつの人間学（anthropologie）の試みとして捉える視点を採用しつつ、『アップタウン・キッズ』を読み直し、そこに記録されているハーレム・ライターズ・クルーの試みを捉え直してみたい。

2. 文化運動としてのハーレム・ライターズ・クルー

ハーレム・ライターズ・クルーは、前述の通り、1980年代後半から90年頃にかけてニューヨーク市ハーレムにおいて始まった。『アップタウン・キッズ』はウィリアム・コーンブルムとの共著であるが、コーンブルムも述べるように、この運動の実質的なオーガナイザーはテリー・ウィリアムズであり、主著者もウィリアムズと考えてよいだろう。公民権運動に深くかかわってきた経歴を持つウィリアムズは、1980年代を通じてドラッグ・ビジネスなどのいわゆるアンダーグラウンド・エコノミーにかかわる若者たちや、貧困層の若者に関するエスノグラフィを出版してきた。それは『貧困のなかで育つこと』（ウィリアム・コーンブルムとの共著、1985）、『コカイン・キッズ——麻薬ビジネスの青春』（1989）、『クラックハウス——彼方からの報告』（1992）などの著作にまとめられたが、その経験から次なる研究プロジェクトとして、より直接的に社会にコミットできるものを構想したという。⁽⁹⁾ それが、このハーレム・ライターズ・クルーの試みへとつながることになる。ウィリアムズは次のように語る。

「私は、このグループ［ライターズ・クルー］を始める数年前に、ワシントン・ハイツからセントラル・ハーレムに引っ越して来ました。それまで住んでいたワシントン・ハイツの若者のコカイン事情に関する本をちょうど仕上げただけでした。そのこともあって、新しく引っ越してきたこの地区で発生していた危機に対処するためには、もっと社会運動的な方法をとろうと考えました。ライターズ・クルーは、そうした考えを実現するためのチャンスだった

のです」⁽¹⁰⁾

ハーレムのすぐ北に隣接するワシントン・ハイツで行われた、若者たちのドラッグ・ビジネスに関する研究を通じて、ウィリアムズは若者たちの直面する日常生活上の現実を目の当たりにしたはずである。ウィリアムズの語るハーレムで「発生していた危機」とは、貧困、ドラッグの蔓延、学校教育の機能不全、ストリートの暴力など、スラムに典型的に見られる問題である。1980年代から90年代の初頭にかけては、全国レベルで見ると、共和党のロナルド・レーガンおよび同党のジョージ・H・W・ブッシュが大統領を務めた時期だった。伝統的に「小さな政府」を目指す共和党政権のもと、冷戦構造のなかで軍事費が増大し、福祉・教育関連の予算が削減された。そしてその影響は、貧困層にもっとも強く出るようになった。

そのような状況下で、1980年代の後半にはすでに負のイメージで語られる傾向の強かったニューヨーク市公営団地に焦点を当て、予備的調査を行なった後、ウィリアムズらは団地に暮らす10代、20代の若者たちに鉛筆とノートを配り、彼ら・彼女らの日常的な経験を書いて持ち寄るよう呼びかけた。ハーレムにあるウィリアムズの自宅を開放し、そこに彼らを集め、食事を振る舞い、日誌を読み合ってもらい、だがもちろん若者たちの話は、日誌を読むことで終わることはなく、そこからさらに展開し、これまで見聞きし、経験し、思いを巡らせてきたことがらを、時に真剣に、時に冗談を交えながら、何度も語り合うことになる。週一回だったはずの集まりは、いつしか週に二回、三回と増えることもあり、ウィリアムズの自宅を離れて、別の場所で突然話し合いが持たれるようなこともあったという。

ハーレムの団地に暮らす若者たちにとって、日誌を書き、それを持ち寄って読み合い、言葉を重ねるというのはどのような営みだったのだろうか。日誌に刻まれているのは、彼らの日常生活の経験であり、その経験から自分たちが考えたことである。日常生活を書くことを契機として一種の社会運動を展開した点は、ライターズ・クルーに限った特徴ではなく、諸々の生活記録運動や識字運動とも共通性を持つと言える。

たとえば1950年代の日本では、社会学者の鶴見和子らによって、女性たちを中心にした生活記録運動「生活をつづる会」が展開された。社会学を専攻しながら関東の県営団地日本語教室への参加型調査に深くかかわった山田佳苗は、この生活記録運動に注目し、それが自分たちの居場所を自動的に保障されない人々（主に主婦）によって、語るべき「自己」を見だし、さらに「自己改造」へと至ることを企図して始められたものだったと指摘する⁽¹¹⁾。そして山田によれば、この運動は「書く」という営みそのものよりも、こうした場所への参加を通じて、女性たちが「自己」を語るための「余地」をつくっていったことに重要性があり、それが社会変容の試みへとつながったという。

また、横浜市寿町で20年以上にわたって識字運動に尽力した大沢敏郎は、「日本のなかでの識字は、文字の読み書きを自分のものとすると同時に、自分という人間の読み書きをあきらかにする（ラディカルに人間を学ぶ）ことではないのか」と述べる。「読み書きをできなくさせられた人々」のなかにこそ、「人間としてのもっとも良質で未知のたからものが埋もれている」⁽¹²⁾という大沢の発言と合わせて考えると、大沢の識字運動が読み書きの習得そのものにあるというよりは、それを通じて、時として抑圧されてきた自らの肉声を再発見・再獲得していくことにあったことがわかる。

これらの運動とハーレムで展開されたライターズ・クルーとは、明らかに歴史・社会的文脈が異なっており、単純な比較はできない。だがそれでも、この上記の二つの運動を参照軸として考えるならば、公営団地の若者たちにとっては、ウィリアムズの自宅で自らの日常生活について話し合う機会を持つこと自体が、これまで生きてきた日常から距離をとり、見直すような経験だったと想像するのは難しいことではない。自らの生を日誌に書くこと、そして書いたものを同じ場所に参加する仲間と分かち合い、解釈し直すこと、これがライターズ・クルーの活動の根幹にある。書くこと、話し合うことは、自らの経験をこれまでとは異なる言葉によって描き直す営みであり、自らの生のあり方を捉え直す機会でもある。そしてまた、同様の経験を持ち、そのなかに異なる意味や価値を見いだす仲間がいることの発見でもある。その点ではライターズ・クルーは、意味の産出や、価値（価値意識）の生成および変更にかかわる文化運動だったと言える⁽¹⁴⁾。

3. 非制度的な場所

意味や価値の生成にかかわる文化運動にとって、第一に決定的に重要なことは、そのための場所あるいは機会の確保である。一見それは当たり前に見えるかもしれないが、自明のことではない。大学などの学校教育における授業やゼミナールであれば、制度のなかにおいてかたちが存続することは困難ではない。だが、非公式の集まりや、非制度的な場所での取り組みの場合、そのような場所が継続して確保されるためには、複数の人々による積極的なコミットメントが不可欠になる⁽¹⁵⁾。

人々の関係を結び直す場所が、自然発生的には生じ得ないという感覚は、ライターズ・クルーの発起人であるウィリアムズとコンブルムの次のような記述にも見てとることができる。

お互いを気遣い、配慮するコミュニティというものは、どこからともなく自然に現れるものではない。懸命な取り組み、度重なる奮闘、献身的な営みによって作り出されるものである。「こんなに大きな街に、こんなにたくさんの貧しい家族を、これだけ高く積み上げてごらんない

よ」とヴァージニア・ジョンソンはため息まじりに語る。キング・タワーズ団地の管理人である彼女は、馬鹿げたことを決して許さない。「それを考えれば、いろんな人間がここにいるのはなんの不思議もないし、そうした場所であまことを運ばせようとするのがとても難しいってことがわかりますよ。だけど、うまくやることは可能だし、実際にうまくいくんですよ。少しばかり汗と血を流すことでね」⁽¹⁶⁾

「コミュニティ」という語は、アメリカ社会の文脈では肯定的に用いられる傾向が強い。日常的な用法においてそれは、「共同体」や「人々の集まり」などを意味するが、それだけに時として、「集まる」という表面的な現象だけであたかも有意義な関係が生じているかのように錯覚させる概念でもある。だからこそ、政治家、宗教家、地域リーダー、メディア戦略家たちは、好んでこの言葉を用いようとする。だがウィリアムズらはここで、人々の実際の献身的な取り組みから、現象としての「コミュニティ」を見つめ直す。そして、自分たちの取り組みを、そうした既存の各種の取り組みに重ね合わせていく。

制度のもとでの取り組みがほとんど自動的な継続を前提にする一方で、非制度的な取り組みは継続が自動的に保障されていない。だから、それが継続している場合には、取り組みの背後に複数の人々の献身があると考えることができる。そしてこの奇妙な逆転現象と同時に、次のような逆転現象も指摘できる。それは、制度下での取り組みの中身がどれほど形骸化していようと、制度として存続しているという理由だけで注目を集めることが可能である一方で、非制度的な取り組みは積極的な参加を前提とするにもかかわらず、非制度的であるという理由から注目を集めにくい、ということである。それゆえにウィリアムズたちは、次のように書く。

私たちの社会は、テリー・ウィリアムズの家のリビングルームや公営団地のベンチで行われるような、^{アンダーグラウンド}「非制度的」で、非公式のセミナーに対して、ほとんどあるいはまったくその功績を認めない。「知性」に関して狭い定義しか持たない社会は、典型的なルールからはみ出し、順応することのない人たちの知的能力や情緒的感性を多くの場合否定する。従来の教育者たちの若者に対する考え方は、時にはあからさまに人種差別的で人を貶める類のものであり、白人たちの教室での話し方と、それ以外の生き方に表れる熱のこもった表現方法との間の溝を反映している。教育界の門番たちは、若者が用いる言語——「どうよ (s up)」「マジで (word)」「おい (yo)」「ねーさん (sis)」「にーさん (bro)」「ゆるーく (chill)」——を、無学で、知性のないものと見なすことが頻繁にある。そのため多くの場合、

こうした言語表現に結びついた感情、願望、危機感が、教室において支配的な構造のなかで失われてしまう。文化の溝は深まるばかりである。⁽¹⁷⁾

この断片的な引用からも読みとれるのは、ウィリアムズらが若者たちの言語表現とその背景に最大限の敬意を払い、受けとめようとしている姿である。学校の外で培われた感性や感覚、それをひとまずは自分たちの言葉で表現してみることを、これを運動の出発点にしているのだ。ここで確認しておきたいのは、この肯定が単純な意味での状況の全面肯定ではなく、既存の教育制度において圧倒的な権威のもとでなされる同化主義を背景とし、それに抗ってなされている点である。上記の引用箇所にも見られるが、若者たちの知識や知恵の内容だけでなく、口調やトーン、仕草などを含めたその表現の様式が、時として特定の人種・民族やその文化と結び付けられ、教室のなかでの評価の対象から除外される。他方で、「白人たち」や「まっとうな人たち」の話し方に象徴される知識のあり方、振る舞い方、生の営み方は、特に疑問に付されることなく評価される。記号論の用語である「有徴—無徴」という図式で表現するならば、ここに集まる若者たちは圧倒的に有徴の側に立っており、ウィリアムズたちはその有徴の側の表現を肯定しようとするのである。⁽¹⁸⁾

だが徴を付けられる側にある彼らの話に耳を傾けるのは、ウィリアムズたちだけではない。それ以上に、集まりに参加する仲間たちである。彼らは、同年代の仲間たちに向けて語り、同時にその仲間の声に耳を傾ける。その意味でライターズ・クルーは、語り合い、聞き合う場所であり、ここに生じるのは個人によるモノローグのように見えながら、参加者の関係のなかで紡ぎだされる語りでもある。仲間であり他者でもある人々の話を聞き、彼らに向けて語ること。このように一般化して書くと、それは世界中のどこでも日常的になされている営みと変わらぬように見えるため、特別に思えないかもしれない。だが、日常的な問題が恒常化しているがゆえにかえって重要視されにくくなったり、問題視する余裕さえ生まれなくなったりするケース、あるいは自らの生存に直接かかわるような問題であるがゆえに改めてそれを語る時間と場所の設定を必要とするケースが存在する。日常の連続のなかで顔を合わせて言葉を交わすだけでは到達できないレベルで語り合い、聞き合うための場所。それがライターズ・クルーの集まりだったと言える。

もちろんそれは、ライターズ・クルーのなかだけに存在するわけではない。同様の場所は、セツルメント・ハウスや教会、あるいは若者たち自身によって確保された場所にも見いだせると、ウィリアムズたちは書く。

ひとりの教師が、ひとつの教室に三〇人以上の生徒を抱えて奮闘しているということは、生徒が個人的に面倒を見

てもらい、話を聞いてもらう機会がほとんどないということの意味している。それゆえに若者は、セトルメンツ・ハウスや教会での、議論が可能な非公式の集まりで話をするのである。またそうした話し合いが、「平和で安心できる場所」と呼ばれる、あらゆる形の暴力が許されておらず、若者たちが状況を掌握している場所で行われることもある。⁽¹⁹⁾

「ブレイス・オブ・ピース」という若者たち自身による言葉が、『アップタウン・キッズ』には頻繁に登場する。それは自分たちの日常を見つめ直し、言動を振り返り、生を考える場所である。生活の諸々の制約や問題から一時的に自身を引き離し、都市の喧騒や大人の監視から逃れ、ストリートの危険から身を守る場所である。ライターズ・クルーの参加者である16歳のバドは、こうした場所について次のように語る。

「ブレイス・オブ・ピースっていうのは、俺らが落ち着いてくつろげる場所さ。……（中略）……団地には、ブレイス・オブ・ピースがそこらじゅうにあるんだ。……（中略）……自分たちだけになりたいときには、そういう場所に行くんだ。俺らは、そこで、話をしたり、ラップをしたり、知的な思索にふけったりするんだよ」⁽²⁰⁾

あるいは同じくライターズ・クルーの常連である17歳のデクスターにとって、それは生について、そして死について考える場所だった。そのことが次の記述から読みとれる。

デクスターは、タクシー運転手によって友人のひとりが殺され、別の友人も足を撃たれた後に、ブレイス・オブ・ピースに行き、座っていたときのことを憶えている。その友人たちはタクシーの料金を払わずに逃げようとしたのだった。ブレイス・オブ・ピースに行くのは、タバコを吸ったり酒を飲んだりするためではなく、「落ち着いて頭を冷やし、生きるということについて考えるためだ」とデクスターは言う。生について——そして同時に死について——考えること。それがブレイス・オブ・ピースで行われていることなのだ。考え、話すこと——それぞれの夢や見通しについて、そして世界にある悪や愚行について。デクスターはじっくりと考える場所を必要としていた。なぜ彼の幼稚園以来のこの無謀な友人たちは、タクシーから金を払わず逃げるなどという愚かなことをしたのか、なぜそもそもお金を持っていないのにタクシーに乗ったのかと。⁽²¹⁾

度重なる危機のなかでわが身に降りかかる問題と格闘し、タフに生き抜く力を持ったハーレムの若者たちは、こうした「ブ

レイス・オブ・ピース」が自分たちにとって必要だと口をそろえて語る。通常はこのような場所は、公営団地の屋上や階段の吹き抜け、建物の背後の目につきにくい所などにつくられ、そうした所にたむろする人々は「ガラが悪い連中」とされるが、そうではないとウィリアムズは述べる。

公営団地の至るところで、若者たちがこれほどまでに熱心にものごとを考え、話をしているなどと誰が想像するだろうか。騒々しい夜、遅い時間にアップタウンのマディソン・アベニューを歩くと、よそ者には、そこかしこをさっと横切る影や、寒さに背を丸めつつ通りの角をひとりでうろついている見張り屋しか目につかないだろう。しかし、階段の吹き抜けや地下通路で、ティーンエイジャーや若者は座って、生や死、スニーカーや宝石、ラップやグラフィティ（そしてそれらの作品がアートとなるために必要な質）、地下鉄、軍隊や殺し屋、ナショナリズムや宗教などについて、夢中になって熱心に話している——そして、その他の話題も、多くの人々がこうした若者たちは気にけることもなく、また言語化することもできないだろうと考えているような種類のもののなのである。

若者たちは、ギャング集団としてブレイス・オブ・ピースにたむろしているわけではない。だがそれでも、多くの人々は彼らを不良と見なす。結局のところ、彼らはマリファナを吸い、壁に落書きをし、なんら「建設的」なことをやっていないではないか、というわけだ。年若く貧困であるということは、それだけで不良であると見なされることなのだ。⁽²²⁾

このような「ブレイス・オブ・ピース」の延長線上にライターズ・クルーの集まりがあると言ってよい。あるいは、ウィリアムズたちが「ブレイス・オブ・ピース」の存在に気付いたのが、ライターズ・クルーの集まりを通じてだったことを考えると、実は「ブレイス・オブ・ピース」ですでに若者たちが行っていたことを、ライターズ・クルーが図らずも発展させたと言ってもよいかもしれない。

4. 見えにくい知恵、隠された感性の発掘

非制度的な目立たない場所での文化運動を通して、ウィリアムズらはハーレムの若者たちの能力や知恵、感情や感性に触れていく。それは洗練された言語になって表現される場合もあれば、断片的な言葉のきれはしとして表現されることもあったという。しかし表現の洗練度にかかわらず、それは民族誌的探求（ethnographic exploration）のトレーニングを受けたウィリアムズたちにとって、注目し値する内容を持つものだった。

たとえばライターズ・クルーの参加者のひとりであるティナ

は、ある日の集まりで自分の経験を手紙の形式にしたため、読みあげた。彼女は、もともと集まりにはたまにしか現れなかったが、その日、「ぐちゃぐちゃの感情が内側からわき出てきて、そのことについて話したかった」と述べたうえで、自分の受けた暴力の経験について語った。少し長くなるが、言葉表現の断片性とトーンを示すために引用したい。

わたしは、^{フレッシュマン}高校一年〔日本の中学三年に相当〕のとき、「近所の顔見知りの少年〔常識的で近づきやすく誰からも好かれる男性という意味もある〕」から何度もレイプされた。それは八年前になる。男性の女性に対する暴力は、アップルパイと同じくらいアメリカ的。テレビや映画のスクリーンは性暴力で充滿している。印刷された女性たちは男たちの消費主義を満足させるために使われている。ラップ音楽はあらゆるタイプのアバズレや売女を生み出してきた。それでもわたしは、アイス・キューブ、クール・G・ラップ、LL・クール・J、ブランド・ヌビアン、ロード・フィネス、スリック・リックが気に入っている。わたしは、この社会の性差別的ジョークや、女性に対する暴力的犯罪をひたすら繰り返す者たちの、被害者だ。

1
Dのつくもの、お父さん（Dad）と離婚（divorce）のせいで、わたしは基本的に最低の男の子たちや男性に、お父さんの要素を見つけようとしてしまう。だけど、おじたちもいる。ニューヨーク市内にはお父さんはいないから、ババの親友たちは愛情をもって、世話をしてくれる。わたしは、みんなからそれぞれ一部分を取ってきて、それらをひとつに集めてお父さんをつくることで、ババというものをつくりあげている。笑。今こそ自分の恋人と知り合うべき時だ。つねにあったお父さんの愛が離婚の後は消えてなくなってしまい、わたしはとても不安定になり、今でもわたしはお父さんに対して怒っているのだから。それではお元気で。

2
わたしはしきりに彼氏を欲しがっていた。

3
その嫌な奴は、わたしが育った建物の同じ階に住んでいた。本当に単純な話だ。生々しい細部の描写は必要ない。わたしがこの話をみんなにするのは、単に、アメリカでどれだけ頻繁に女性がレイプされているかを知っていたら、一三歳のときにわたしはあれほどの孤独を感じずに済んだらと思うから。あいつはそのことを知ってたし、今となって

はわたしの母は彼を嫌っている。タバコを吸ったり、大麻やアルコールを試すのと同じで、それは反抗を表明する行動だった。分別のある女の人には、あいつが人間のクズだってことがわかっていた。分別のある子なら、マリファナを常用しコカイン中毒の「恋人」と、自分の住んでいる建物の廊下でいちゃついて時を過ごすなんてことをしないだろう。わたしは不安定で、だからあいつに惹かれたのだ。そのことを認めるのは難しい。だけど本当のことだ。あいつは、わたしたちの家のドアが閉まるのを聞いた後や、わたしが女友だちの部屋を後にしようとするときに、きまっぴつとも廊下に現れた。廊下での激しいペッチングは、その夏の間ずっと続いた。九年生〔日本の中学三年生に相当〕になる一週間前、わたしは買い物に出かけた。明るいオレンジ色のTシャツにジーンズにアディダスを身につけたあいつは、窓からわたしを見て、わたしたちの住んでいる階のエレベーターのところで待ち伏せし、わたしを彼の部屋へと引きずって行き、レイプしようとした。わたしは静かにドアを閉めるようになり、エレベーターに乗らずに階段を使うようになった。わたしのとった方法は、一四歳の誕生日の前の日の夜にはうまくいかなかった。あいつは、わたしがあいつの性的要求に従わないなら、わたしの母にばらすぞと言ってきた。わたしは、本当にそうするだろうと思った。学期が終わった後の夏、わたしの魂は三カ月間を父親とアフリカで過ごすことで清められた。ニューヨークに戻ってきたとき、わたしはあいつと話すのをやめた。一〇年生になって二日目、あいつは、知恵遅れの隣人が見ている前で、わたしを廊下で引きずっていくほどにひどい状態になっていた。

4
一七歳の誕生日、わたしは母にレイプについて話した。母は、わたしに対して怒ったりなんかしないということをわからせてくれた。そのことで、わたしはとても救われた気持ちになったし、愛情を感じた。わたしは自分に対して暴力的犯罪がなされたという事実と向き合わずに毎年やり過ごしていたため、そのことが悪い影響をもたらした。わたしは、レイプが当たり前になっている状況が続いていくのを望まない。

5
わたしはひどく自信を失っていたので、高校ではどんな男の人でもわたしのことを好きにならなかった。^{高校三年}の春に、クラスメイトのひとりが、サウス・ブロンクスで大型トラックにひかれて死んだ。わたしは、ダルトンのパーティではいつも気分が悪くなるようになっていた。そんな状

態になることで、自分の怒りを表現していた。学期の最後に、ダルトンにいた最高の男のひとりが、わたしをプロム[高校等で行う卒業記念ダンスパーティ]に誘った。それはその日の午後のうちに学校中に知れわたった。他の噂話以上にすごかったのは、彼が白人でわたしが黒人だったからだ。わたしはプロムでも気分が悪くなった。高校四年のときには、自分は女子大に通う以外ないだろうということに気付いた。離婚、ダルトン、レイプの狭間で、わたしは完全に自信を奪われてしまっていたから。

6

一学期の間父親と過ごし、それからの一年半は、ペンシルベニアの奥地にあるフェミニストの集まる女子大に通った。現実社会から遊離した象牙の塔ににいるということに気がつき、うんざりして、そこを辞めた。提供するものはすべて西洋的でヨーロッパの白人向けであるような図書館に、付き合っていられなかった。白人女性版のフェミニズムや「政治的公正さ」という考え方に嫌気がさした。

7

ニューヨーク。コットンライクラ生地。ところで、なぜわたしたち(女性)は半裸の格好をしているのだろうか。コットンライクラは、一四丁目よりも北で着ることはできない。もし着ると、ストリートで性的な嫌がらせを受けることになる。コットンライクラを着て電車に乗った日、男たちが目でわたしを脱がせてきた。ある男が地下鉄の“6”ラインはどこかで尋ねてきたとき、わたしはジーンズとミッキーマウスのTシャツを着ていた。わからない。その男はわたしをにらみつけて、「おい女、こっち来いよ!」と言う。わたしは「くたばれ!」と言う。こういう振る舞いはストリートに限られたことではない。職場は男だらけで、女性で働いているのはわたしだけ。N.W.A.のイージー・Eによる曲を誰かがかけていて、その曲は女の人に彼のペニスのしゃぶり方を教えている。誰かが、それでわたしが勉強になったかと尋ねた。ジャングル・ブラザーの「ブラック・ウーマン」という曲の演奏は、すごく偽物に聞こえる。先週、わたしの好きな男と激しく口論した。言葉のやり取りの合間に互いにつかみ合ったり、ひっぱり合ったりするほどに彼を怒らせ、そうすることでわたしはとても性的に興奮した。愛と同一視された男性性、男らしさ、そして暴力は、完全に不健康だが、それでもわたしはそれを味わい楽しむのだ。

わたしは、思春期の終わりが近づくこの時期に、自分の考えをみんなに話したかった。わたしと同じようにみんなも性差別によって洗脳されてきたし、アメリカ社会で男に

よって女が支配されるやり方に、つねに対決し、疑問を投げかけるわけでもない。お父さんを探し求めることをやめて、実際の父親をよく知ろうと思う。主には、性差別について、特に女性に対する暴力につながるものについて心を傷めている人間として、わたしは話をしている。それではお元気で。⁽²³⁾

ティナが、母親にすらすべてを話したわけではないこの自らの経験と思考とを、不安を感じながらも語ったのは、ライターズ・クルーの集まりで仲間が自らをさらし、想いを語るのを目撃したからだという。一読して気付くように、ここに記されているのは、洗練された詩の表現ではないし、まとまりのある文章群でもない。連想が連想を呼び、複数の話が横へ縦へと流れ、論理が飛躍し、言葉が混乱している。あるいは、少なくとも第三者にはそのように見える。しかし、自らのレイプの経験とアメリカ社会に広く現象する性暴力や性差別、人種問題、ドラッグの問題などが、彼女自身のやり方で関連付けられ、表現されている。

ティナの場合、近所に住む男性個人によって性的暴力を振るわれた。だが、ここにある暴力を、その背景にある社会的あるいは制度的暴力から切り離すことはできない。そのことをティナは、察知している。だからこそ彼女は、自分の経験と社会全体の問題とを並置し、往復する。自分の経験から社会問題を考え、社会問題のなかで自分の経験を捉え直す。それは、「自分の経験」と「他者の経験」とを往復する思考の運動だと言える。しかしそれ以上に次の点を指摘しておきたい。それは、彼女が自らの個別具体的な経験と社会全体により広く見いだされる問題とを往復する際に、一般化された問題を洗練されたやり方で語るという方法をとっていない点である。むしろ、ここに見いだされるのは、自らの存在から切り離すことのできない問題を、それでもなんとか一般化し得る領域に引きつけ、等身大の表現で語る姿である。

一般化された問題を「三人称の問題」と名付け得るとすれば、ここに表わされているのは「一人称の問題」であり、それを身近にいる特定の仲間たちとともに議論して表現するのは「二人称の問題」である。⁽²⁴⁾ライターズ・クルーの集まりの場で話し合われるのは、暴力、学校教育、性差別、人種差別、ドラッグの蔓延など、社会問題ではある。だが、それ以上に重要な点は、一般論で語られがちな社会問題が「一人称」および「二人称」の問題として議論されている点である。

問題の把握における人称の特徴は、暴力や痛苦の問題を考える際に、とりわけ重要である。なぜならメディアの発達した社会においては、暴力やそのもとで生じる痛苦は、時には過剰なまでに流通と消費の対象になるからである。そしてそれは、ティナが手紙を通じて告白したような身体的暴力だけに限らず、

精神的暴力や制度的暴力を含めたより見えにくい暴力、恒常化しているがゆえに問題となりにくい暴力に関しても同様である。ティナの告白が流通し、より広範な読者に読まれるということは、個別の文脈を離れ、「三人称」の世界で受容されることを意味する。そのもとでは、彼女の表現は、混乱したものと受け取られるかもしれない。同様に、ハーレムの若者たちの表現もまた、独自の文脈を離れ、解釈されていく。ラップやグラフィティに代表されるようなストリートの表現もまた、見えにくい暴力との格闘の末に獲得されたものと位置づけるならば、そうした表現を、いくつものレベルで錯綜する暴力のなかでの叫び声、吃音、沈黙として捉えることができる。だからこそウィリアムズらは、次のように書く。

アップタウンの若者は、独自のやり方で自文化と関連付けながら、善悪の判断にかかわるジレンマを経験する。精神的葛藤、自己探求、対話は継続しているのだが、それは通常、他者の目からは隠されている。ラップ・アーティストの大きな叫び声や、ズボンに腰の下にさげて履き帽子を斜めにかぶった若者の一見愚鈍な態度の背後には、たいいていの場合、苦痛を背負わされた思考や、深い情熱（受苦）と折り合いをつけようとする知性があり、生きることに対する抑えきれない愛情があるのだ。⁽²⁵⁾

もちろんウィリアムズらは、すべての若者がラップやグラフィティなどの典型的なストリート表現に行き着くと考えているわけではない。社会に認められた表現になれば、それは「アート」あるいは「ストリート文化」として受容されるが、他方で承認に向かう手段を持たない場合、若者たちの「表現」はさらに厳しい目で見られることになる。洗練されない表現も含めて、ウィリアムズらは、若者たちの時に断片的で、錯綜し、混乱に満ちた表情、仕草、言葉を捉えていこうとする。ここには、若者たちの言葉を含めた表現を、一種の「妥協物」として捉えようとする発想が見てとれる。⁽²⁶⁾

5. 複数の声、複数のまなざし

ヒップホップなどに見られるストリートや若者の表現にリスペクトを払っているウィリアムズらは、しかし、それを手放しで称賛するわけではない。その意味では、若者たちの態度や表現を過度に理想化したり、それに迎合したりするよう態度は『アップタウン・キッズ』のなかには見受けられない。むしろライターズ・クルーの集まりでは、ラップなどの文化表現について、その担い手であると同時に消費者でもある若者たち自身が、どのように位置づけているのかが語られる。当然若者たちの間からは、ラップの詞の内容について、反論も提出される。とりわけ女性の参加者からは、ラップに見られる「性差別」や

「男性中心主義」に対して批判が投げかけられる。『アップタウン・キッズ』には、そのような複数の声やまなざしが盛り込まれている。たとえば以下の記述だ。

ジョイスは、「性差別と人種差別は同じ難問の二つの顔」であり、男性は「ジェンダーに関する内実」について話し合うのを恐れているか、あるいはそうしたくないのだと考えている。彼女は、多くの若者たちが簡単に「政治的見解を求めて一九歳の人間に頼ってしまう」ことを怪訝^{けげん}に思っている。「考えてもみて、ラッパーたちは年若い子どもなんだよ。セックスや政治、戦争についての彼らの発言が、ものごとの最終的な判断にかかわるものとされるべきじゃないよ」

ジャックは、「ヒップホップがこんなに大真面目に受け取られるなんてバカげてる」と思っている。「俺たちは、ユーモアの感覚だとか、ヒップホップの大部分が楽しいもの、楽しさをつくり出そうとするものだという事実を忘れてしまってるよ」

「『売女^{ホー}』だとか『性悪女^{ギャングスタ・ビッチ}』だとか呼ばれることが楽しいなんて思わない」とシーナが応じる。「ドクター・ドレ（Dr. Dre）が何年か前にアルバムを出して、そのなかで女があいつのペニスをしゃぶるべきだとか歌ってる。そんなのクソツレだよ。おもしろくもなんともない」⁽²⁷⁾

こうした議論のやり取りは、しかし、単に表現上の「正しさ」をめぐるものではない。それは、彼らや彼女らの存在そのものにかかわる議論である。彼らにとってラップに歌われる内容は、現実社会の反映であると同時に、自らの文化に強い影響力を持つものでもある。そして彼らは、ラップの歌詞の内容が時として過剰なまでに「暴力的」になるよう演出され、売り上げを伸ばし、かえって自文化に対する偏見を補強していること、そしてそのことで誰かが得をしていることに敏感である。たとえば、ライターズ・クルーの参加者ですぐれた書き手でもあるジョイスは、自らの文化圏においてヒーローやヒロインとして称賛され、崇拝の対象となる人物が、同時に自文化における問題の構造を補強し、結果的に自分たちを拘束するという連鎖に、強い懸念を抱いている。マイク・タイソンの強姦事件についての議論がとり交わされたとき、彼女は次のように述べる。

「黒人女性の奮闘に意味付けをしようとする男たちは、ジェンダー問題よりも人種問題を優先しなければいけないってことを私たちに納得させることで、結局男女の共犯関係を助長してるよ。男の人は、私たちを静かで無残な戦争に従事させたんだ。被害者に自分たちの受けた迫害について話らないように命じてね。そうすることで、ひとつのす

ばらしいアフロセントリックな民族であり続けられるとか言って、だけどそんな幻想を信じていない人だっているよ。黒人性と女性性との間、人種への忠誠と人間性との間にある、荒れ狂った海を泳げないから、心をかき乱されるあの問いを投げかけざるを得なくなるんだ。それは、黒人の女性解放運動家の作家、パール・クリージがマイルス・デイヴィスの性差別的な蛮行を非難したときに勇気を持って問いかけてことだよ。つまり、いったいどうして彼らは私たちをレイプしておきながら、それでも私たちの英雄でいられるのかって問い。どうして彼らは私たちのことを殴り、それでもなお私たちの指導者でいられるのか？ 私たちの夫や恋人、友人、そして憧れの存在でいられるのか？ そして答えは……彼らにはそうあり続ける資格なんてないってこと、そうでしょ？」⁽²⁸⁾

ここでは、表現活動や社会活動のあり方の根源にかかわる問題が、ジョイスの口から語られていると言ってよい。直接語られるのは「黒人文化」における女性の位置であり、彼女の念頭には、ラップなどのストリート表現における性差別の問題がある。だが、すぐれた芸術を生み出しながらもその生成のプロセスにおける暴力と向き合おうとしない芸術家たちや、社会の問題に深くコミットしながらも自らの暴力を自覚しない者たちに対する、根源的な批判だと言える。

「ハーレムの公営団地に暮らす若者たち」と一口で言っても、当然そのような範疇に入れられる集団は一枚岩ではない。彼女らが置かれた境遇には共通の要素を見いだすことができる一方で、彼らの置かれた家庭環境や受けた教育、そこで培われる認識と感性とは大きな差異がある。そのような差異を、「ハーレムの若者たちの多様性」と一言でまとめてしまうことは容易いが、そのように片付けてしまった瞬間から、想像される多様性は「一様な多様性」へと収斂するという、本末転倒でありながらありがちな危険をはらむことになる。⁽²⁹⁾ ウィリアムズらがとった方法は、記述をまとめあげるための大きな概念をできるだけ避けながら、具体的な記述のなかで複数の声を示すというものだった。

たとえばそれは、第一章の冒頭の記述に登場するデクスターとマーカスの語りにも見ることができる。デクスターとマーカスは、ほぼ同年代のハーレム出身の男性だが（マーカスは20歳）、家庭環境や受けた教育、ソーシャル・キャピタル、文化資本などの点において大きく異なっている。

「僕は、ストリートとか団地とのつながりを、絶対に失いたくないね」とマーカス・ブラウンは言う。中西部にある大学院に進学した後で、彼は夏の間だけハーレムに戻っていた。「僕はこの赤レンガの建物で、人生とその闘いに

ついて学んだんだ」。マーカスは、低所得者向け公営団地から出発して、今ではわりあい中産階級的な生活を送っている。しかしこうした彼の上昇の軌跡は、幼い時期の教育やいくらかの生まれつきの才能のおかげであって、私たちがこれから出会う他の若者たちの道のりとは異なっている。人生を切り拓くための闘いは、デクスターのような若者たちにとっては、より困難をともなったものになる。

「とにかくオレは、ここから出て行かなきゃ」、デクスターは語る。「南部でもコネチカットでもどこでもいいから、大学に行けるような場所に行かなくちゃ。とにかくここから抜け出す必要があるよ。昨日、団地のビルの中に入って行ったら、仲間たちに出くわしたんだ。奴らは無駄話をしていて、[ドラッグの]取引とかしようとして待ってた。ビルの中の階段に座ってたんだよ。そしたら突然、二人の警官がオレらの方に向かってきて、『壁に手をつけ、はやくしろ』って言ってきた。オレはべつになにか持ってたわけじゃないから全然よかったんだけど、『くそっ、またかよ』って思ったね」⁽³⁰⁾

ライターズ・クルーのメンバーは全員が団地出身者であり、議論のなかではしばしば団地という場所の特殊性が語られるが、各々の団地の位置付けや経験、愛着などは、決して一様ではない。早い段階からハーレムの貧困層の生活から飛び出す機会を得たマーカスにとっては、ハーレムや団地との結びつきは自覚的に取り戻し、維持し直そうとするものだった。他方で、ハーレムの貧困の渦中で生活せざるを得ないデクスターは、公営団地は結びつきを保ったり、懐かしんだりする対象ではなく、一刻も早く抜け出したい場所だった。こうした多種多様な語りが、ライターズ・クルーの集まりでは披露されている。

6. 「介入」のアート

ライターズ・クルーは、上に見てきたとおり、非制度的な場所において複数の声とまなざしがせめぎ合うなかで意味や価値を生成する文化運動だった。この集まりのさらにもうひとつの特徴は、それが議論や文化運動のための場所であるだけにとどまらず、そうした試みを通じたある種の「介入」の場になっている点にある。ここで言う「介入」とは、外在的に暴力的に価値を押し付ける類の介入ではない。ウィリアムズは、実はこの議論の場に、ある種の「仕掛け」を用意しているのだ。

たとえばライターズ・クルーのメンバーは、頻繁にラップやヒップホップ文化について語り合うが、彼らは単にウィリアムズの自宅で自分の考えを披露し合うだけではない。メンバーの何人かはウィリアムズとともに、フランス領事館主催の「世界ラップ会議」に出席する。そして、そこである論者がラップの起源についてフランツ・ファノンを引き合いに出しながら語る

のを耳にする。

クルーのメンバーたちは混乱していた。このフランツ・ファノンとはいったい何者なのか。話された内容はどんな意味を持つのか。テリー・ウィリアムズがそれを説明し、明らかにしようと試みた。一九六〇年代に書かれた『地に呪われた者』のなかでファノンは、アルジェリア人たちがフランスとの戦争中、日常的にどれほどの冷酷な抑圧的行為に遭遇したのかを観察し書き記した。飢饉、追い立て、失業——これらは日常的な現実であり、彼らの多くが暴力へと向かったことはなんら不思議ではなかった。フラストレーションと怒りのなかで、アルジェリア人同士で暴力を振るい合う場合もあった。ギャングがストリートを徘徊し、人々はほんのわずかな収入のために殺し合った。現地の人々は、ファノンも理解していたように、敵である外国からの入植者たちを恐れるのと同時に、同胞である市民をも恐れたであろう。

ライターズ・クルーの若者たちは、ハーレムやロサンジェルス・サウスセントラル地区、フィラデルフィアにおいてこれまで為されてきた同様の攻撃的行為を思い起こしていた。彼らは、間接的であっても、ギャングによる暴力には精通していた。それゆえに、自分たちの世界においてファノンがどのように関連するのかを、今となってはより良く理解することができた。植民者という存在によって無視され、拒絶されているが、しかしその植民者の世界に強く憧れることもあるという意味で、クルーの若者たちとアルジェリア人たちとの間には類似性があった。彼らは、つねに緊張状態を⁽³¹⁾生きているのだ。

ライターズ・クルーの若者たちは最初、ファノンについて知らなかった。だが、この議論をきっかけにラップについて見解を深めていくことになる。ベルトルト・ブレヒトがかつて「異化作用（Verfremdungseffekt, estrangement effect）」と呼んだ戦略の応用が、ライターズ・クルーの集まりの場でなされている。いわば、これまで慣れ親しんできて、知ったつもりでいた「(自)文化」の背後に、異質な側面や知らなかったことがらを見いだしていくのである。

あるいはまた別の日に若者たちは、ギャングスタ・ラップの「暴力的」に響く詞の起源が、刑務所やストリートで生れた詩や神話にあることを、ウィリアムズを通して学ぶ。刑務所や人種・階級の階層構造のなかで過ごす日常の連続において、そこから抜け出す術や機会もなく、言葉以外にはなにも持ち得ない人々が、同じ境遇に置かれた人々とともに、自分たちに向けて生み出した表現として刑務所詩や神話があることを、参加者は知っていく。彼らは、ファノンの社会分析やラップの起源とな

る詩句を、「純粋な知的好奇心」から知るのではない。むしろ自分たちの置かれた逃れようもない状況を、認識し、なすべきことを考えるために、それらの知識を参照軸とするのだ。

ウィリアムズらの「介入」は、社会的背景や歴史的背景を提供することで、若者たち自身が異なる視点を見つけだしていくという、いわゆる知識にかかわる「介入」だけにとどまらない。時としてそれは、特定の空間における振る舞い方を直接注意するという方法をとる。

若者たちがハーレムの外の環境へと足を踏み入れて行く際には、異なる社会的状況のなかでどのように立ち居振る舞うべきか経験を積んでいくことになる。その点でテリー・ウィリアムズは、彼が若者たちに紹介した大人たちとともに、重要なお手本となっている。彼は目立たない仕方で、間接的に、若者に影響を与えようと努めており、なにをすべきか、どのように振る舞うべきかを教示することはめったにない。そうする代わりに彼は、日常の些細なやり取りのなかで存在そのものによって、若者の習慣的な振る舞いに光を当て、時にそれと対立するような異なる態度のあり方を伝えるのである。たとえばテリーは、彼の仕事場があったラッセル・セージ財団の建物に、デクスターやシーナ、マリサを連れて行ったことがある。デクスターは、洒落た革製の帽子を横に傾けてかぶっていた。ストリートや仲間たちの間では、帽子は特定の意味を持つ。だが、ラッセル・セージのような仕事のための環境では同じような意義は持たない。テリーは、彼にそっと注意を促し、帽子を脱ぐように言った。デクスターは、少し驚いた様子だったが、言われるとおりにした。その後、テリーの家で、デクスターは帽子を脱いだ方が良いのかと聞いてきた。テリーは彼に自分の好きなようにして良いと伝えた。テリーはデクスターに、彼が帽子をかぶることは尊重されるべき文化的、私的な表現のひとつの形ではあるが、同時に彼は自ら慣れ親しんだ世界を超えたところにある環境や文化的コードに敏感になるべきだということを伝えようとしていた。デクスターたちは、自らのルーツを否定したり、異なる文化コードのみを全面的に受け入れたりするべきではない。だが、行動範囲を広げるために、異質な⁽³²⁾ものに対する感受性を育んでいく必要があると伝えようとしたのだ。

一見するとこの種のウィリアムズによる「介入」は、単純な意味での啓蒙であるかのように見えるかもしれない。だがそうではなく、それは自分が慣れ親しんでいるものとは異なる文化コードの存在を、若者たちに示すところに目的がある。異なる文化コードが支配的な空間においては、自分たちが当たり前だと思え方や感性が当たり前ではなくなる。またそれだけで

なく、時としてそれに気付かないことは、重要な機会を失ったり、致命的な結果をもたらしたりすることさえある。そのことを実は、ハーレムの若者たちは日常において経験している。たとえばハーレムの若者が警察とやり取りせざるを得ない場合、求められる文化コードに合わせて話し方や振る舞い方を変えられるかどうかは、その人物の命運を左右する。⁽³³⁾

異なる場所や集団内における暗黙の了解事項やルール、作法などに気付き、それに合わせて話し方や振る舞い方をシフトできるかどうかは、社会的および文化的に学習される能力である。ウィリアムズは、異なる文化コードの存在をそれとなく示すことで、若者たちが自らの想像力の限界を想像し、それを広げていくことを促そうとする。だが同時に、自らの文化コードを超えて、振る舞いのモードを切り替えることは、若者たちにとって「自文化」を裏切る行為であるかのように意識されていることにも、ウィリアムズは気付いている。あたかも「学校にまじめに通うこと」「よい成績をとること」「まっとうな世界で生きようとする」とは、「『白人文化』にそまること」かのように、

多くの若者たちが、ストリート文化に順応しないこと、「礼儀正しく」あるいは「白人のように」振る舞うことが、自分の友人、ひいては自らの人種集団を裏切ることを意味するという考えを持っている。順応するよう迫る圧力は非常に強く、安全な抜け道を探し出すのは容易なことではない。青少年たち、なかでも意志が弱かったり、社会的援助をあまり得られない者は特に、つねに自分の可能性を発揮しようともがいている。そして彼らは、ダウントウンに行くという文化横断の経験をする際には、アップタウンの文化に忠実であり続けることを強く求められる。たとえばデクスターは、ドラッグの取引にかかわる友人たちによって、普通の仕事に就かず彼らの仲間になるようせがまれていた。かつてデクスターの「近所の親友」だった少年たちは、彼が応じなかったために彼のことを「ふぬけ」「いくじなし」と罵った。そして彼に残された選択肢は、永久に弱虫として罵られたままなのか、その地区を立ち去るかのどちらかであった。デクスターは時として、どうすべきなのか、どの道に進むべきなのか、わからなくなると言う。「あんたがどうやってやってるのか不思議だよ」と彼はテリー・ウィリアムズに言う。「どうやってダウントウンの白人どもとつきあって、アップタウンに戻って来て、研究して、ブラザーと暮らすことができるんだい。学校に行って、このストリートに戻って来ると、仲間たちはオレが学校に行くことで時間を無駄にしてるって言う。学校に行くのがオレにとっていいことなのはわかってる。だけどオレには仲間も必要だよ。オレらはずっと長いこと一緒にいるからね。でもオレは学校で、白人が周りにいるときには、違う

人間にならなきゃいけない。二つの世界に生きているみたいな気になるよ。どちらか一つの世界に完全に入っていくことができないんだ。それから、どちらか一つの世界から完全に抜けることもできない。⁽³⁴⁾

ここに見られるデクスターのジレンマは、単純な意味での「自文化」のコードへの固執ではない。「非自文化」である「主流文化」への過剰同調を恐れるあまりに、異なる文化コードのもとで振る舞いを切り替えることに対する罪悪感や抵抗が語られているのだ。他方でデクスターは、すでに異なる文化コードにも片足をかけているため、「自文化」のコードが求めてくることに対しても違和感を覚えている。デクスターのジレンマは、自らの存在が二つの「文化」の間で「どっちつかず (betwixt and between)」の状態にあることから来ている。⁽³⁵⁾

「自文化」と「白人文化」との間での葛藤するのは、デクスターのようにストリートを中心に生きてきた者だけではない。ストリートの圧力を比較的受けずに育ち、教育機会に恵まれたマーカスのような若者もまた、大学に進み、卒業し、やがて働くという人生の過程でジレンマに直面する。マーカスが自分の姿を重ねるようにして、あるいはそれを自省するようにして、「ブルジョア的」黒人男性を戯画化して語る場面がある。

「そいつは、若い黒人男性、大都市の『ゲッター』生まれ。強い男でルックスもいいし、性格もいいし、弁も立つ。だけど貧乏だ。そいつは大家族のもとで勤勉さという価値観を教わった。学校ではつねに成績優秀だった。そして今では名門大学に通っている。そこでそいつは企業国家アメリカで一プレイヤーとなる訓練を始める。大学では人気があり、黒人や白人、その他様々な人種の友だちがいる。人気があるので露骨な人種差別は受けずに済んでいる。そいつは、黒人コミュニティには厳しい苦難があることを知ってるし、その原因の大部分がレイシズムだということも知ってる。けれどそいつは、『善良な白人たち』も何人か知ってる。だから『過激な黒人学生組織の言っているようなこと』が正しいなんてことはあり得ないと結論付ける」

……「こういう類の黒人男性は、結局のところ、自分自身や自分に与えられた条件についてはそれぞれの個人に責任があるって考えている。だから彼の目標は、個人主義と個人的利益に基づいて設定される。IBMでの職を得る日もそう遠くはないし、利益になりそうな株への投資や郊外——そいつが正しい地区だと考えるところ——の家の購入もじきにそれに続く。そいつのブルジョア的な態度は、そいつの古くからのコミュニティ、特に一緒に育った『オール・ゼム・レイジー・ニガー』^{オール・ゼム・レイジー・ニガー}の結びつきを簡単に断ち切ってしまう。金を持ってる黒人ということで、そいつは成功例

として認識されるけど、僕はそいつは黒人コミュニティの最悪の失敗例のひとつだと考えてる。そいつは給料も、ライフスタイルも、アイデンティティも、白人たちに依存してそれに左右されているんだ。彼の属する中産階級は白人たちのつくったものなんだ。

『ブルジョア的な』ブラザーたちは、政治的にナイーヴだから、政治的な力を持ってない。そいつは民主党員で、ティップ・オニールとかテッド・ケネディ、ジミー・カーター、そういう連中に仕えている。そいつには経済的な力もない。他のブルジョア連中と一緒にあったって、モービル石油が明日にでもそいつらを買収できるんだからね。そいつはマイルスと同じくらいモーツァルトを愛し、バラカと同じくらいブランニングを愛し、ガーナよりもずっとずっとギリシアを愛する。ヨーロッパ中心主義なんだ。白人コミュニティによって骨抜きにされてしまったんだ。そいつは自分自身から疎外されてしまった。大学でそいつは新しい言語を習ったんだ——白人英語だよ。そいつは黒い魂を忘れてしまったんだ。子どもはジョンとかスージーとか名づけられ、エピスコパリアン〔キリスト教の一派、プロテスタント・エピスコパル教会員〕として育てられるだろう。それはまったく成功じゃない。アフリカンの改造だよ」

……「ブルジョア連中たちについてはもっと詳しく話せるけど、僕らのほとんどが最低ひとりはその奴を知ってるよね。まずいのは、僕は簡単にそうになってしまえたってことなんだ。白人たちは黒人たちのために計画を用意していて、僕の人生もそういう数々の計画に遭遇したんだ。計画はひとつだけじゃなくて、たくさんあるってことを憶えておかなきゃいけない。レイシズムの仕組みはもはや単純じゃないんだ。いわゆるダイナミックなものになってる。それは変化するんだ。ある瞬間はこっち、次の瞬間はあっちというようにね。ある瞬間にはドアが閉まっているかと思えば、次の瞬間には開いている——けど中には入れない。そうかと思えば、次の瞬間には中に自分がいて、けど角の方で動けなくなってる。次の瞬間はテーブルについているけど、話すことができない。その次は話せるけど誰も聞いてない。ある瞬間には奴隷で、次の瞬間は違う。ものごとが変われば変わるほど、実は同じ状態にとどまり続けるんだ」⁽³⁶⁾

マーカスのこの語りは、自らの立ち位置をえぐることによってすぐれた社会分析にもなっている。そこでは、およそ以下のようなことが語られている。一部のアフリカ系アメリカ人が地位や社会階層の上昇を経験する際に、なにに同調しなにを捨て去る可能性が高いのか、またその地位の上昇が偶然手にするこ

とのできた才能と機会に依っているにもかかわらず、個人主義のもとでは「個人の努力」に帰せられていくこと、そして一部のアフリカ系アメリカ人の「ブルジョア化」が政治的・経済的基盤をコントロールすることにはつながっておらず、「白人社会」への依存状態には変わらないこと、それゆえに一部のアフリカ系アメリカ人たちの「成功」は、実際には「黒人コミュニティ」全体として見た場合には「失敗」でしかなく、

この語りをデクスターのそれと合わせてみると、社会学者 W.E.B. デュボイスが「二重意識 (double consciousness)」という言葉を通じて 1903 年の著作『黒人のたましい』で語った問題が、約 90 年の月日を経た後になお、ニューヨーク市ハーレムの若者によって経験されていることがわかる。⁽³⁷⁾ デュボイスにとって「二重意識」とは、「意識」という言葉の持つイメージとは裏腹に、身体的特徴や振る舞い方、言語の使用法、生き方などにかかわる問題であり、「カラー・ライン」によって隔てられたアメリカ社会に生きる黒人の、存在あるいは生そのものが抱えざるを得ない二重性という問題であった。この二重性は、20 世紀後半を生きる若者たちにとっても、たとえば「ストリートの世界」と「まっとうな世界」、「アップタウン (ハーレム)」と「(アップタウンの文化を商品化し流通させる) ダウンタウン」、「黒人の文化」と「白人の文化」という対比で経験されている。そして、『アップタウン・キッズ』の解説でも述べたが、この二重性の困難は、二項が明確に区分され隔絶していることにあるのではなく、両者が複雑に入り組み、分かちがたく結びついてしまっているところにある。

「二重意識」を発生させる状況やそれがもたらす矛盾や困難を「解消」することは難しい。そして、それを回避して生きることほぼ不可能だろう。だからこそウィリアムズは、若者たちに、慣れ親しんだ「自文化」の「境界線」を超える経験を持たせようとする。「文化的境界線」は、目に見えにくくはあるが、実は人々の行動を深く規定している。とりわけストリートでは、ブロック (地区) あるいは団地ごとの「縄張り」意識が強く働く。極端なケースでは、若者たちは大半の時間を自分の出身のブロック (地区) だけにとどまって過ごすという。だがそのような場合でも、「白人の文化」とまったくかわりなく生きることが不可能だろう。

ウィリアムズらは、若者たちに機会があるたびにダウンタウンでの仕事を紹介し、彼らがトラブルに巻き込まれたときには弁護士を紹介したり裁判長に手紙を書いたりもする。彼らの相談相手となり、時にはお金を貸すことさえある。デクスターは、ライターズ・クルーのもうひとりの参加者であるパコとともに、紹介された大学の研究プロジェクトのスタッフとして、国立公園のなかでのキャンプに参加することになるし、その経験を通じて、彼らは最終的にはハーレムを一時的に出て行くという決断に至る。また、『アップタウン・キッズ』ではあまり触れら

れていないが、料理を得意とするウィリアムズは、集まりのたびに若者たちに手料理を用意している。団地の若者にとって、日常的に食べないような料理をライターズ・クルーの場で味わうことが、慣れ親しんだ食文化の境界線を越えていく経験だったのは想像に難くない。

ウィリアムズらのこうしたかわりには、単に対象となる人々を観察し、話を聞き、記録するというエスノグラフィの方法とは、一線を画している。それは積極的な「コミットメント」であり「介入」である。近年の例で言えばそれは、「参与的行為調査 (Participatory Action Research)」あるいは「アクション・リサーチ」と呼ばれるものに近い。⁽³⁸⁾そして、この種の研究には、常に一定の批判がつきまとう。要約すればそれは、「客観性」あるいは「科学性」、「検証可能性」の確保に関する批判——その記述はどこまで信頼できるのか——と、介入を行なうことに関する政治性と倫理性をめぐる批判——それは啓蒙主義による注入ではないのか——である。

こうした批判とそれへの応答は、研究者の学問観や認識論的前提が深くかかわっているため、一般的な議論の整理をしてもあまり実り多くはない。詳細な議論は稿を改めるとして、ここでは一点のみ確認しておきたい。それは、ウィリアムズらの積極的な「介入」は、外在的に一方向的になされるわけではなく、双方によってつくられ、互いに「介入」し合う関係のなかでなされたという点である。もちろんウィリアムズらが大学に籍を置く大人の社会学者であり、ライターズ・クルーの参加者が10、20代の若者であることは、それだけで不均衡な権力関係をほのめかす。だが、それだけをもってここに生じた関係のすべてが不均衡な権力関係で説明できると結論付けるのは正しくない。ウィリアムズらが「介入」の対象としているのは、若者たちの考え方や生き方そのものというよりは、その背後にあるストリートの暴力であり、スラムの恒常化した貧困の問題であり、言い換えれば社会の再生産を規定する構造である。彼らの「介入」は、若者たちとともに、自分たちを取り巻く状況を少しでもましにしようとする試みのなかだ。そしてその試みのなかで、「介入」を意図した側もまた「介入」されるのだ。

『アップタウン・キッズ』では、このような「介入される介入者」の姿を垣間見ることができる。人文・社会科学においていまだに客観的観察が可能だと信じている者はいないだろうが、それでも言葉の技芸に長けた観察者は通常、「対象とのしかなるべき距離」を確保することで、美しく、勇ましく、もっともな論理を展開する。ところがウィリアムズらは、この「しかなるべき距離」を確保できない。あるいは、できないのではなく、確保することを放棄しているようにも見える。

筆者が聴講したフィールドワークの方法論に関する大学院講義でウィリアムズは、エスノグラフィを用いて社会問題に取り組むことができるはずだし、そのためならばエスノグラフィの

伝統的な習慣やルールを改変することも厭わないと語ったことがある。また別の機会に彼は、ロバート・パットナムのソーシャル・キャピタルに関する議論から着想を得て、貧困層の若者を対象にソーシャル・キャピタルを増やす試みを思いついたとも語った。⁽³⁹⁾いずれの発言にも見られるウィリアムズの発想の特徴は、学問の手法や理論を、それだけで完結したものとせず、社会に「介入」し働きかけるための手段として用いながら、その先にまで学問上のプロジェクトを展開しようとする点にある。

それでもハーレム・ライターズ・クルーの試みは、単なる美談で終わらない。成長の過程はでこぼこであり、ウィリアムズらが書くように、「不規則に、少しずつ、断続的に」しか進まない。そしてそのことと合わせて考えると、『アップタウン・キッズ』の冒頭に掲げられた、ロバート・K・マートンの言葉は印象的である。そこにはこうある。

いくつもの失敗からよりも、たったひとつの成功から多くを学ぶことができる。ひとつの成功例は、それが達成可能なのだということを証明してくれるのだ。それがどのようなことであれ、可能性があるのだということを。⁽⁴⁰⁾

若者たちの奮闘を記録した本の冒頭に、「失敗から学ぶ」ではなく、なぜその反対の意味のこの言葉が掲げられているのか、当初筆者は量りかねていた。だがライターズ・クルーの試みと合わせて考えると、それはライターズ・クルーの「成功」を祝福したり記述的に説明したりするものではなく、奮闘を重ね続けなければならない若者たちへの後押しであり、いくつもの失敗のなかでそれでもいくつかの成功を若者たちが自らつくりだしたことへの共鳴の言葉だと考えることができる。

ウィリアムズは筆者とのインタビューの際に、ライターズ・クルーへの参加を通じて新たな機会を得て生活に変化させていった者がいる一方で、手をさしのべてもまったく力になれなかった者もいたと語ったことがある。そして、個々のケースを検証するのは今後の課題のひとつだとしながら、次のように語った。「ただ、今言えることは、ストリートの力があまりにも強すぎたということです」。

5. 結びにかえて——文化運動のエピステモロジーに向けて

本論では、ハーレム・ライターズ・クルーの特徴を描き、解釈してきた。若者たちによって書かれた日誌とそれをもとに展開された会話や議論の記録は、すぐれた同時代のスケッチとなっている。それは、複数の声が重なり合うことで編まれた「対話的」なエスノグラフィのようでもあるし、細部が組み合わせることで成立するモンタージュのような作品でもある。彼らの日常的な問題がなんであり、その背後にはなにがあるのか、なにを夢見て、なにを志すのか、どのような不満や不安を抱えて

いるのか、なにを喜びとしているのか、そのような問いにかかわる若者たちの証言とともに、それを背後から見守る大人たちの姿が、『アップタウン・キッズ』には散りばめられている。

また、エスノグラフィが通常は、すでに確立した場所や集団を前提とするのに対し、『アップタウン・キッズ』では、ウィリアムズらが若者たちとともに場所をつくりだし、その場所を記録している。この場所は、若者たちが議論と対話を通じて、自分たちによる意味の産出や価値の生成を行なう場であった。日誌を書くという行為自体は、個人的な営みに見えるが、それを読み合い、議論を交わすことで、モノローグはダイアログへと変わり、思考の運動が生まれる。彼らは、ウィリアムズらとともに、等身大の表現で自らの置かれた状況を把握し直し、同時代の問題を「一人称・二人称の問題」として捉え直そうとする。

そして最後に、ライターズ・クルーは、ウィリアムズたちによる「介入」の試みでもあった。その「介入」は、ウィリアムズらがいくつかの「仕掛け」を用意し、若者たちに異なる文化コードの違いを悟らせると同時に、彼らが日常のなかで内面化するに至った「文化的境界線」を超えてもらうためのものであった。またそれは、彼らをしかるべき人物に引き合わせ、将来的には就職にたどりつくような工夫でもあった。だが同時にそれは、ウィリアムズら社会学者による一方的な「介入」とどまることはなく、彼らが若者たちによって「介入」されていくプロセスでもあった。ライターズ・クルーは、参加者全員にとって自らの存在をかけた試みだったと言える。

その意味では、ウィリアムズらの手による『アップタウン・キッズ』やその基盤となるライターズ・クルーは、単なる狭義の研究書や社会運動ということを超えて、一種の総合芸術の試みとして捉えることができる。試されているのは生身の人間の総合的な力である。そしてそのような試みから、アートを志す者たちやアート教育に携わる者たちが学べることは大きい。ライターズ・クルーがそうだったように、アーティストもまた、技巧や表層的な目新しさの追求とは別に、同時代に深く向き合うことからアートを掴み直すことができるからだ。日常的に感じ取ってはいる生きにくさ、身体を縛っている規律、内面化してしまった価値を規定している力、それがなんなのかを観察し、それをひっくりかえそうとする試みを始めてみることができる。

謝辞

本論は、『アップタウン・キッズ』の著者であるテリー・ウィリアムズおよびウィリアム・コーンブルム両氏の協力およびライターズ・クルーの参加者であるデクスターとのやり取りがなければ書けなかっただろう。感謝の意を表したい。なお、本論のための研究は、MEXT/JSPS 科研費 20820037、23720430 の助成を受けたものである。

註

- (1) テリー・ウィリアムズ&ウィリアム・コーンブルム（中村寛訳）『アップタウン・キッズ——ニューヨーク・ハーレムの公営団地とストリート文化』大月書店、2010=1994。特に註釈を入れてはいないが、本論執筆にあたっては、筆者自身の『アップタウン・キッズ』の訳者解説も参照している。
- (2) フランツ・ボアズ（大村敬一訳）『プリミティヴアート』言叢社、2011=1927。
- (3) マルセル・モースに関する論考は、たとえば次のものがある。モース研究会『マルセル・モースの世界』平凡社新書、2011。またクラストルの文献は、ビエール・クラストル（穂藻充訳）『グアヤキ年代記——遊動狩人アチエの世界』現代企画室、2007=1972。ポール・オースターによる序文は、Pierre Clastres (translation and translator's note by Paul Auster) *Chronicle of the Guayaki Indians*, New York: Zone Books, 1998。に収められている。
- (4) 中沢新一『芸術人類学』みすず書房、2006。
- (5) 文字の発達した社会における記憶や認識と主に声に依拠した社会のそれとの間の差異について論じた作品としては、ウォルター・オング（桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳）『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991=1982。印刷技術や小説技法とネイションとの関連を明らかにした論考は、ベネディクト・アンダーソン（白石さや・白石隆訳）『増補 想像の共同体』NTT出版、1997=1983。
- (6) フリードリヒ・キットラー（石光泰夫・石光輝子訳）『グラモフォン フィルム タイプライター』筑摩書房、1999=1986。Friedrich A. Kittler (transl. by Michael Metteer, with Chris Cullens) *Discourse Network, 1800/1900*, Stanford University Press, 1992。
- (7) 落合一泰『ラテンアメリカン・エスノグラフィティ』弘文堂、1988。
- (8) 落合は次のように述べる。「エスノグラファーが描写するのは、特定社会の『現実』そのものではない。そこに提示されるのは、その人類学者によるひとつの現実のとらえかたという『作品』だ。だから、民族誌では、人類学者の『作者性』が大きな問題となる。翻訳されるべき所与のテキストなど、どこにも存在しない」（落合一泰、前掲書、p.11）。人類学の醍醐味が「テキスト・メイキング」にあることを、この指摘は言い当てている。
- (9) Terry M. Williams and William Kornblum, *Growing Up Poor*, New York: Lexington Books, 1985。テリー・ウィリアムズ（小林礼子訳）『コカイン・キッズ——麻薬ビジネスの青春』平凡社、1991=1989。Terry M. Williams, *Crackhouse: Notes from the End of the Line*, New York: Penguin Books, 1992。
- (10) 『アップタウン・キッズ』、p.34。
- (11) 山田佳苗「『私だけの部屋』の創出——生活記録運動『生活をつづる会』の試みをてがかりに」新原道信・奥山真知・伊東守編著『地球情報社会と社会運動』ハーベスト社、2006、pp.324-335。
- (12) 大沢敏郎『生きなおす、ことば——書くことのちから——横浜寿町から』太郎次郎社エディタス、2003、p.20。
- (13) 前掲書、p.17。
- (14) ここでは、政策や制度に直接働きかけようとする社会運動とは区別して、個々人の意味や価値、あるいはそれにかかわる、より見えにくい仕草や習慣などの領域に働きかけようとする運動を、文化運動と呼ぶ。もちろんこの二つのカテゴリーは、相互排他的な関係にあるわけではなく、ひとつの運動がどのような側面を強く持ち合わせているのか、その特徴を言い表すためのものである。ハーレム・ライターズ・クルーは、参加者の意味の産出や価値の生成に深くかかわるという点で文化運動としての側面を有すると同時に、ウィリアムズやコーンブルムがその活動とネットワークを通じて、貧困層を対象としたプログラムやそれにかかわる政策決定にも携わっていることを考えると、社会運動としての側面も持っていると言える。なお、ここでいう価値とは、価値そのものであると同時に価値意識（value-orientation）を含む

- が、理論的な区分が主題ではないため、便宜的に「価値」という言葉を置く。価値という概念についてのまとまった考察としては、見田宗介『価値意識の理論』弘文堂、1966。
- (15) 日誌のようなかたちで生活を書くということを根幹に据えて展開したプロジェクトはいくつもあるが、合州国内の同様の試みとして近年もっとも注目を集めたものとして、カリフォルニア州ロングビーチ、ウィルソン高校の「フリーダム・ライターズ」がある。エリン・グルーウェルとフリーダム・ライターズ（田中奈津子訳）『フリーダム・ライターズ』講談社、2007=1999。だが、「フリーダム・ライターズ」が、荒廃していたとは言え、高校という制度のなかで展開したのとは対照的に、ハーレム・ライターズ・クルーは徹底して非制度的な集まりだったと言える。
- (16) 『アップタウン・キッズ』, p. 57.
- (17) 『アップタウン・キッズ』, p. 102.
- (18) 「有徴―無徴」関係については、たとえば山口昌男の次の論考がある。山口昌男『文化と両義性』岩波書店（岩波現代文庫）、2000 [1975]。山口昌男『いじめの記号論』岩波書店（岩波現代文庫）、2007。
- (19) 『アップタウン・キッズ』, p. 102.
- (20) 『アップタウン・キッズ』, pp. 102-103.
- (21) 『アップタウン・キッズ』, pp. 103-104.
- (22) 『アップタウン・キッズ』, p. 105.
- (23) 『アップタウン・キッズ』, pp. 158-162.
- (24) 筆者自身は、養老孟司による「死体の人称変化」についての論考から、暴力や痛みなどの問題の把握・認識における人称変化について考えるに至った。養老孟司・南伸坊『解剖学個人授業』新潮社、1998。「死の人称」については、以下の作品にも言及がある。柳田邦夫『犠^{サクリファイス}牲——わが息子・脳死の11日』文藝春秋（文春文庫）、1999 [1995]。
- (25) 『アップタウン・キッズ』, pp. 93-94.
- (26) 「妥協物としての言語（language as a compromise）」という発想は、やはり関東の県営団地の外国人の若者たちとのかかわりのなかで活動を展開した山田佳苗とのやり取りから得た。劇的な速度と強さで「外部」を設定しては「内部」に取り込んで位置付け、消費と投棄を繰り返す社会システムの作用に、敏感にならざるを得ないマイノリティの若者たちの言語表現が、それでもあり合わせのなかからしか生まれざるを得ないことのジレンマを、この発想は捉えようとする。
- (27) 『アップタウン・キッズ』, pp. 121-122.
- (28) 『アップタウン・キッズ』, p. 156.
- (29) 「島」や「根」、「移動民」などの概念に着目しながら、イタリア・サルデーニャ島サッサリに暮らす人々の生活を探求し続けてきた社会学者の新原道信は、多様性や複数性などに注目する言説が、書き手の認識と具体的な記述において複雑性を獲得できなければ、結局のところ「一様な多様性」に回収されていくことに注意を促している。新原道信『ホモ・モーペンス——旅する社会学』窓社、1997。
- (30) 『アップタウン・キッズ』, p. 32-33.
- (31) 『アップタウン・キッズ』, p. 115.
- (32) 『アップタウン・キッズ』, pp. 151-152.
- (33) 優れた都市エスノグラフィを残しているイライジャ・アンダーソンは、文化コードに合わせて作法を切り替えることを「コード・スイッチング」と呼んでいる。イライジャ・アンダーソン（田中研之輔・木村裕子訳）『ストリートのコード——インナーシティの作法／暴力／まっとうな生き方』ハーベスト社、2012=1999。イライジャ・アンダーソン（奥田道大・奥田啓子訳）『ストリートワイズ——人種／階層／変動にゆらぐ都市コミュニティに生きる人びとのコード』ハーベスト社、2003=1990。
- (34) 『アップタウン・キッズ』, p. 149-150.
- (35) Victor Turner, “Betwixt and Between: The Liminal Period in Rites of Passage,” in *The Forest of Symbols: Aspects of Ndembu Ritual*, Ithaca, New York: Cornell University Press, 1967.
- (36) 『アップタウン・キッズ』, pp. 269-271.
- (37) W.E.B. デュボイス（黄寅秀、木島始、鮫島重俊訳）『黒人のたましい』岩波文庫、1992=1903。
- (38) 「アクション・リサーチ」に関しては、ウィリアム・フット・ホワイト（奥田道大・有里典三訳）『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣、2000=1993。に収められたアベンディクスおよび訳者のひとりである奥田道大の解説を参照。
- (39) ソーシャル・キャピタルの議論については、ロバート・パットナム（河田潤一訳）『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』NTT出版、2001=1993。
- (40) 『アップタウン・キッズ』, p. 29.

